

光明主義における仏教の現代化と宗教間対話

——宗教社会学的研究——

東京女子大学 中村真人

1 目的

光明主義とは、浄土宗僧侶であった山崎弁栄（1859年—1920年）が1913年頃から唱え始めた独自の教義と宗教実践である。口称念仏を中心とした伝統的な浄土宗の儀礼をもとにしながらも、それとは異なった儀礼の体系をそなえている。また、信仰活動は、浄土宗の僧侶や壇信徒だけでなく、広い範囲で実践されている。

この研究では、山崎弁栄の光明主義と、光明主義系宗教運動を対象として、第一に、近代社会と伝統的宗教との関係について考察する。伝統的教義という世界観と価値観の体系にしたがい、伝承された宗教儀礼という伝統的行為を共有する集団が、近代化が急速に進行し合理主義が強く支配していく近現代の社会において、信念と行為をどのように継承し変容させるか、について検討する。

第二に、伝統的な宗教が、自らとは異なる世界観・価値観の体系と接触するなかで、他の宗教や、また非宗教的な信念体系と交流し共存していく可能性について考察する。このことは、キリスト教においては宗教多元主義の問題として提起されている。また、宗教間の対話と共存は、今日の世界において切実な課題である。

2 方法

そのために、第一に、山崎弁栄とその後継者たちによって残された教義と儀礼についての著作、および伝記的資料を、収集し検討する。第二に、現在も継承されている光明主義の宗教運動とその教団に対して観察を行い、儀礼の特徴と組織の実態を明らかにする。

3 結果

光明主義は、口称念仏を中心とする阿弥陀如来への人格的信仰という伝統的形態を保ちながら、数学者、科学者、西洋哲学者など、近代合理主義にもとづき世俗生活を営む人々によって実践され、客観性や合理性を信奉する精神生活とも両立可能な理知的宗教へと変容した。浄土教は、社会生活の現状を「穢土」と位置づけ、異次元の高い価値をもつ生活空間を「浄土」として志向する。伝統的な浄土教では、空間的に極めて遠い位置に「浄土」を想定するが、山崎弁栄は「客体の如来を必ずしも遠き彼岸に置かず」として異なった解釈を示し、信仰による、現世における生活の価値転換を志向している。

また、光明主義は、近代西欧的価値観の根底にあるキリスト教と接触し、その言葉づかいや振る舞いを受容し融和的な態度を示した。儀礼に西洋音階による聖歌が採用され、教義の説明のなかでは、キリスト教神学やカント哲学などの概念が用いられる。こうした融和は、合理主義的価値観とライフスタイルを持つ社会階層への浸透をたすけた。

4 結論

以上から、光明主義は、教義と儀礼の改革によって近代社会に適応するとともに、自らとは異なる宗教や世界観との対話と共存を果たした。自己同一性を保ちながらの自己変容を可能にしたのは、この宗教が重視する「念仏三昧」という言語を超越した直接的宗教体験だった。

文献

中村真人「山崎弁栄の光明主義と伝統的仏教の現代的展開」東京女子大学紀要『論集』第68巻第1号、2017年。